

今週の為替相場見通し(2024年12月16日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		149.70 ~ 153.80	153.70	151.80 ~ 155.50
ユーロ	(ドル)		1.0454 ~ 1.0594	1.0503	1.0300 ~ 1.0625
(1ユーロ=)	(円)		157.94 ~ 161.52	161.34	156.50 ~ 162.50
英ポンド	(ドル)		1.2608 ~ 1.2799	1.2609	1.2500 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	190.61 ~ 195.00	193.89	189.00 ~ 195.00
豪ドル	(ドル)		0.6337 ~ 0.6471	0.6366	0.6250 ~ 0.6450
(1豪ドル=)	(円)	*	95.62 ~ 98.07	97.77	96.00 ~ 99.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1)今週の予想レンジ: 151.80 ~ 155.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

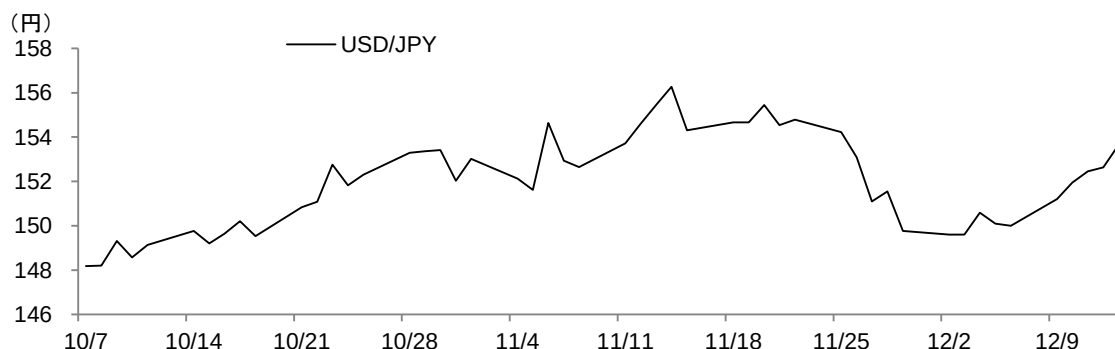
先週のドル/円相場は週を通して上昇し、13日には153円台後半を示現。週初9日、149.89円でオープンしたドル/円は、韓国政治不安、シリア情勢への警戒感などリスク回避の動きにオープン早々149.70円の週安値を付けるも、一巡後は149円台後半で推移。海外時間に入ると、中国政府による来年の積極的な財政政策および適度な金融緩和政策へのコミットを受け、リスク選好ムードとなり、NY時間には米金利上昇もサポートとなり151円台前半まで上昇。10日、日銀の利上げ時期に対する観測報道を受け、円売り主導で海外時間に152円台前半まで上昇。11日も日銀関係者発言を受け荒い値動きとなり、一時151円まで急落も直ぐに反発し、152円台後半まで上昇。NY時間に発表された米11月CPIは市場予想通りの結果となり一時152円を割り込むも、直ぐに152円台を回復して引け。12日、米11月PPIの結果を受け一時152円割れのある場面があるも、概ね152円台前半での推移を継続。13日、10~12月期日銀短観の発表を受け、年内追加利上げ観測が再燃するほどではないとして円売りとなり、東京時間に153.09円まで上昇。その後も日銀の12月会合における利上げ見送り報道や、米金利が上昇する動きに153.80円の週高値を付け、高値圏のまま越週となった。

今週のドル/円は上昇を予想。年内最後のFOMC(17~18日)、日銀金融政策決定会合(18~19日)を予定し、日米金融政策を巡るスタンスの強弱がドル買い・円売り後押しとなりそう。今週のFOMCに向けては、市場は既に▲25bpの利下げを9割以上織り込んでおり、市場の関心は同時に発表されるドットチャートおよびパウエルFRB議長の会見となる。前回9月発表時点における2025年末時点の予測中央値3.375%に対して、足許の債券先物におけるインプライド金利は3.8%程度であり、今回においても上方修正が基本線。また、パウエルFRB議長はブラックアウト前の今月初旬、米国経済の力強さやインフレの高止まりを理由に「中立的水準を見出そうとする中で、もう少し慎重になれる」とコメントしており、その後発表された雇用およびインフレ指標においてそれを翻す程の材料も見当たらず、来年の利下げに慎重姿勢が続けばドル買い材料となろう。日銀金融政策決定会合については、月初から様々な観測報道があったものの、最終的に今会合での追加利上げは見送りがマーケットコンセンサスとなっており、1月会合での利上げに向けたヒントが得られるかどうか焦点。海外情勢や賃金・物価動向を見極めるべく、利上げを急ぐ必要はないとして特段の示唆がなければ、1月利上げに対して市場が疑心暗鬼になり円売りが加速する可能性があるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(12/9~12/13)の値動き:

安値 149.70 円 高値 153.80 円 終値 153.70 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 1.0300 ~ 1.0625 156.50 ~ 162.50 円

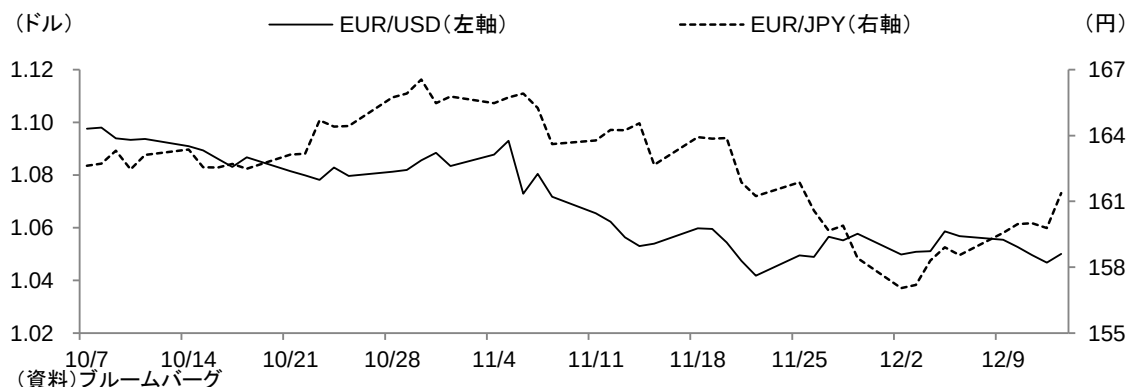
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、週初に高値を付けて以降、軟調な推移となった。週初は1.05台半ばでスタート。アジア時間ではユーロ売り優勢な展開となるも欧州時間にかけては独金利の上昇を横目に徐々に買い戻される。ユーロ圏12月センチックス投資家信頼感指数が予想を下回ったことを受け上値が重かったものの、米国時間では週を通しての高値である1.0594まで上昇した。一方で、10日は独金利の低下やドイツ政治に対する先行き不透明感が強く意識される中で、ユーロ売りが次第に広がる展開となった。11日に公表された米11月CPIは市場予想と概ね一致する結果。上振れ警戒感が相応にあったためか、公表直後はドル売り優勢な中、ユーロは一時反発する場面も見られたが、ユーロを積極的に買う理由が乏しい中では、長くは続かず1.05台を割り込んでクローズ。12日に行われたECB政策理事会では▲25bpの利下げが発表され、主政策金利の中銀預金金利を3.25%から3.00%に引き下げた。その後に行われたラガルドECB総裁の記者会見では「ユーロ圏の経済成長リスクは下振れている」等との認識が示された。ECB政策理事会の結果発表を受け、上下に大きな値動きを見せる場面も見られたものの、結局はユーロ圏の景気や経済に対する先行き不透明感が意識されてかユーロ売りが優勢となった。週末にかけては、欧州時間入り直後に週安値である1.0454まで下落する場面が見られたものの、その後は独金利が上昇したことなどを材料にユーロは買い戻しの動きが強まる中、1.05台まで反発する値動きとなった。

今週のユーロ/ドル相場は軟調な推移になると予想する。先週行われたECB政策理事会で公表されたECBスタッフ見通しでは、2025年の実質GDP成長が前回9月時点よりも引き下げられており、欧州景気が一段と弱含むリスクは相応に高い。こうした状況下では、ポジション調整程度にユーロが買われる場面が見えたとしても、積極的な買いが相場を押し上げることは期待できない。また、今週開催されるFOMCでは、欧州とは対照的に米国経済の底堅さ及びFedによる利下げペースの一段の減速が明らかになる可能性が高いだけに、ドル高地合いになる展開を想定しておきたい。今週は力強い米国経済に対して下方リスクが高まるユーロ圏といった構図が次第に市場で意識されることで、ユーロ安が進行しやすいと見ている。主な注目材料としては、16日(月)ユーロ圏12月製造業・サービス業PMI、17日(火)独12月Ifo企業景況感指数、独12月ZEW景気期待指数、20日(金)ユーロ圏12月消費者信頼感指数などの公表を控えている。結果によっては、為替相場に大きな影響を与える可能性があるだけに注意を払いたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/9~12/13)の値動き: (対ドル) 安値 1.0454 高値 1.0594 終値 1.0503
(対円) 安値 157.94 高値 161.52 終値 161.34



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.2500 ~ 1.2800 189.00 ~ 195.00 円

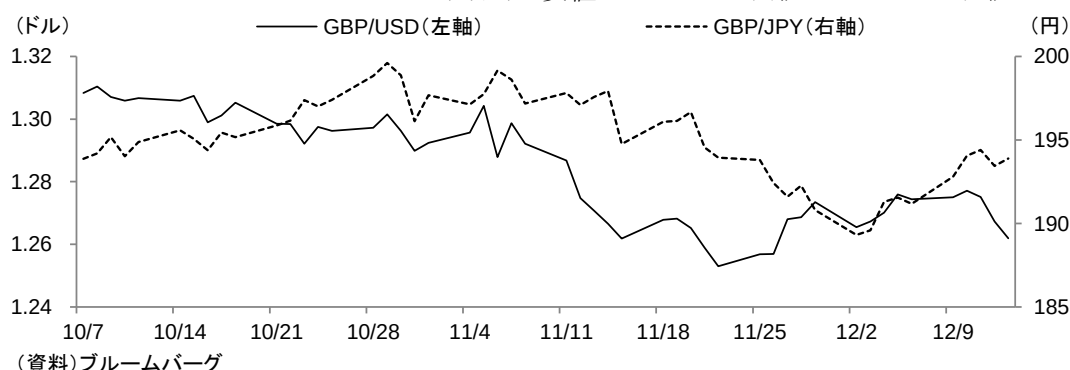
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、下落。9日に1.27台半ばで取引開始。シリアの地政学リスクが意識されるも、中国当局の景気支援に関する発言を受けてリスクセンチメントはややポジティブで、英ポンドは堅調な立ち上がりと言えた。10日は小動きで翌日の米11月CPIを待つ展開。11日は、米11月CPIを控えドルがやや買われる展開だったが、同指標が予想通りでリリースされると上昇分をはきだす。12日はECBが▲0.25%利下げしユーロが弱含むのに連れ安となるも1.2700レベルで反発。しかし13日は、朝方の英10月GDPが予想外に減速となったことで英ポンドは1.26台前半まで下落した。対円では上昇。9日に191円台半ばで始まると円安の動きに10日には193円台後半まで上昇。11日は、日銀が次回会合で利上げしないこととのリスクはない、との報道があり円売り地合いとなる中、米11月CPI発表後に194円台後半まで上昇。12日はECB決定に絡み上値重く193円台前半まで一時下落。だが13日は、日銀の追加利上げ後ろ倒し観測から円が売られ一時194円台まで上昇した。

今週の英ポンド相場は、上値重い展開を予想。注目は18日(水)のFOMCと19日(木)の英中銀の金融政策会合。とはいえ、後者の英中銀については本会合での利下げは行われず波乱なく通過しそう。13日の英10月GDPが前月比で予想外の0.1%減速となったが、スワップ市場の織り込む利下げ確率にもほとんど影響はなく、引き続き2025年内の4回利下げを見込んでいる模様。一方で前者のFOMCは、11日の米11月CPIが予想通りだったこともあり、事前予想の通り▲0.25%利下げとなりそう。すでに市場織込みは100%近く、ドットチャートにサプライズがない限りはドル相場に大きな影響は与えないと思われるが、先週末にかけて弱含んでいる英ポンドにひとまず下げ止まりのきっかけを与えるのではないかと見ている。対円では、さらに19日(木)の日銀金融政策決定会合が波乱要因。先週出てきた利上げ先送り観測でやや不透明感が増しており、どちらかという利上げサプライズによる円高リスクが大きい。オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティはおおよそ上下に3円程度の変動を見込む。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/9~12/13)の値動き: (対ドル) 安値 1.2608 高値 1.2799 終値 1.2609
(対円) 安値 190.61 高値 195.00 終値 193.89



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 0.6250 ~ 0.6450 96.00 ~ 99.00 円

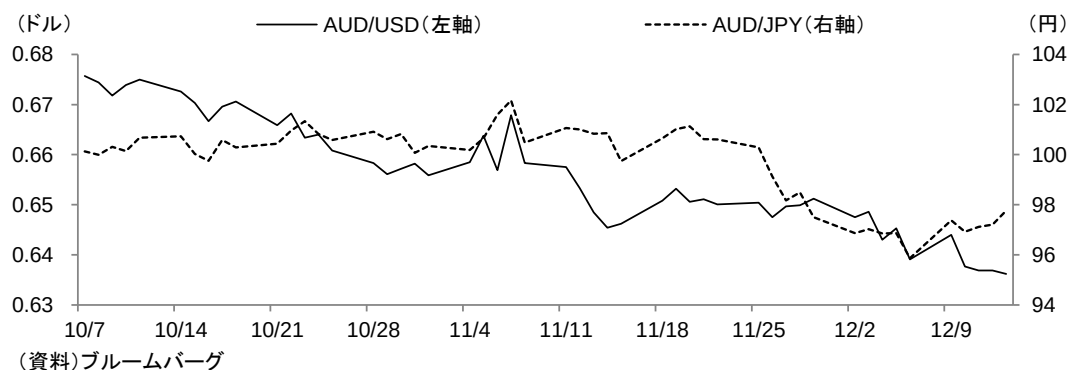
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は週初に週高値となる0.6471を付けた後、上値重く推移した。週初9日、豪ドル相場は0.6399でオープン。中国・中央政治局会議において、2025年の経済政策に関して「より積極的な財政政策と適度に緩和的な金融政策を実施していく」との方針が示されると人民元や銅、鉄鉱石など資源価格の上昇と共に豪ドル高の展開となり、一時、週高値となる0.6471まで上昇。10日、RBA政策理事会でのハト派的な金融政策決定を受けて下落し0.64を割り込み、その後も米金利上昇を背景に軟調推移。11日、中国当局の人民元安容認報道による人民元安に連れ安となったほか、資源価格の下落も重しとなり、2023年11月依頼の安値となる0.6337まで下落した。12日、市場予想比堅調な豪11月雇用統計に加え、中国株や資源価格の上昇もサポートとなり0.6430まで上値を拡大。その後、米金利上昇や資源価格の反落を背景に0.6370近辺まで値を戻した。13日、主要イベント通過後で材料に乏しい中、0.63台後半で小動きとなり、結局0.6366で越週した。

今週の豪ドル相場は、上値の重い値動きを予想する。RBA政策理事会は政策金利であるキャッシュレートの誘導目標を4.35%で据え置くと決定(市場予想通り)。2023年11月にインフレの根強さを背景に利上げを再開し4.35%として以降、9会合連続での据え置きとなったが、今回はハト派転換した。声明文では「金融政策は十分に引き締めめである必要がある」などが削除され、「インフレ圧力が低下しているという幾らかの確信を得つつある」というハト派文言が追加された。ブロックRBA総裁も次回2025年2月会合での利下げ開始を否定せず、RBAの利下げ開始が2025年2月会合に前倒されとの期待が高まっている。豪雇用市場の堅調さ、中国の経済政策期待を背景とした豪ドル買い要因はあるものの、豪7~9月期GDPでも内需の弱さが確認されており、ファンダメンタルズは強弱まちまちである。国内主要イベントを通過したため、今週は17日(火)の米11月小売売上高、17日(火)~18日(水)12月FOMCなど外部要因に振られやすい。12月FOMCでの利下げは規定路線だが、米景気の強さやインフレ高止まりが意識される中でドットチャートが大幅に上方修正される場合には、ドル買い主導で豪ドル相場を下押し、2023年10月以来の安値を試す展開を想定しておきたい。また、18日(水)~19日(木)に予定されている日銀金融政策決定会合を巡る事前報道や政策決定を受けた、豪ドル/円相場の乱高下にも注意が必要である。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/9~12/13)の値動き: (対ドル) 安値 0.6337 高値 0.6471 終値 0.6366
(対円) 安値 95.62 高値 98.07 終値 97.77



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。